

七人塚

しちにんづか



登場人物

ナレーター

かこちゃん

祖母

箸職人

女房

村の男

役人

手下

和尚さん

留守番の人

村人 1

村人 2

村人 3

村人 3

1



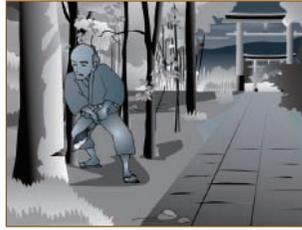
2



3



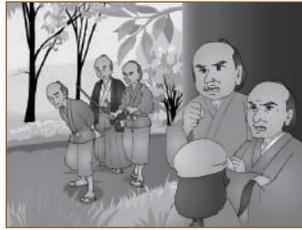
4



5



6



7



8



9



10



11



12



13





祖母

もうじき今年も暮れるという年の瀬の昼下がりに、かこちゃんとおばあちゃんは近くのショッピングストアにでかけました。かこちゃんのお父さんとお母さんの結婚記念日がもうすぐなので夫婦箸を買いにきたのです。

「さて、この辺にお箸売り場がありそうだわねえ。」

ああここにあるわ。どれにしようかしら。」

かこ

「アッ、これきれいよ、おばあちゃん。貝殻がくつついてる。」

お母さん好きそう、ピンク色でいいもん。ホラこれもいいなあ。

金色や銀色の模様がすてき。お父さんが喜びそう。ねえおばあちゃん、おばあちゃん。どうしたの？」

祖母

「あら、ぼんやりしてしまっただねえ。おばあちゃんね、お箸のお話をおばあちゃんからきいたことを思い出してね。」

「えっ、ひいおばあちゃんにどんなお話きいたの？かこききたい。」

かこちゃんにせがまれたおばあちゃんは、近くの椅子に座ると遠くを見るように目を細めゆつくりと話し始めました。それは箸作り



一家の悲しいお話でした。

箸職人

むかし吉岡の荻が久保という所に、働き者の箸づくりがいました。その男は、箸をうまく仕上げる腕の良い職人でした。毎日木をわり、せつせとけずり上手にはしを作っていました。けれどいつも暮しは貧しく食べるのがやつとという毎日でした。ある年、とうとう箸の材料にする木がなくなってしまうました。

「よわたたのう。箸を作る木がもうねえ。金もねえし、買うことも出来ん。箸を作らんと子供らに飯を食べさせることもままならねえ。どうしたものか。」

箸職人

箸づくりは、何日も眠れない日が続きました。

「このまんまじゃ、食べさせるもんがなくなる。あつそうじゃ。」

箸づくりは何を思ったか、おかみさんも子供たちもぐっすり眠っている夜中にそつとふとんを抜け出しました。

箸職人

「このまんまじゃ一家飢え死にじゃ。仕方ねえ。仕方ねえ。」

男はブツブツ言いながら真つ暗な道を急ぎました。



箸職人

あたりはふくろうがホーホーと鳴くだけで、シーンとしています。

男が向かったのは、近くの林でした。その林は「お林」と呼ばれる幕府が直接管理していた林で、その木を切る事は固く禁じられていました。

しかしそこにはたくさんすぎの杉の木が植えられていたのです。杉の木は箸を作るのにとっても適した木ですが、「お林」の木を切るなんてことは、とんでもないことでした。男はその掟を破ってしまったのです。

「神様どうかお許しください。子供らに飯を食わせなければなんねえんです。どうかどうか。」

男は迷いながらも意を決して、のこぎりで杉の木を切り始めました。人に見つかれば一家打ち首という重い罪です。男の胸は罪の重さにドキドキ、足は恐ろしさでガタガタ、手は神への恐れで

ブルブル震えていました。やがて大木は、ミシミシバサツと大きな音をたてて倒れました。

男はなたを取り出し、枝を切り落としました。それから急いで枝を



役人
村人 1
村人 2

と頼みは、聞き入られませんでした。
「何とかならんか。ふと魔がさしたただけなんじゃろ。」
「まだ年端も行かない子供らまでじゃあ、あんまり酷だべ。」



村の男
役人

たばねて背中に担ぎ、家に戻りました。
この真夜中の出来事の一部始終を見ていた村の男がいたのです。
「お役人様、大変です。箸職人が、お林の木を切ってしまったんで。」
村の男は、そう役人に密告しました。

「それは何としたことか。早速ひつとらえよ。」

次の日箸づくりは、いつものように仕事をしていました。そこへ役人が手下をしたがえてドカドカとやってきました。

「それは、お林の木だな。こともあろうにお林の木に手をかけるとはふとどきせんばんである。ひつとらえよ。」

「あつしはどうなってもよいですが、どうかあとの者はお助けください。」

箸職人



和尚

「あの働きもんの箸づくりを、しかも一家皆殺しとは何と殺生な、たった一本の木ぐらいで殺してなるものか。」
と旅を止めて処刑場に急ぐのでした。

留守番人

「留守い番の人は
「事情をきけば、急を要することです。早速飛脚を出しましょう。
行き先は承知しています。」
そう言つて和尚さんに急ぎの知らせを届けました。旅先のお寺でその手紙を読んだ和尚さんは、
「あの働きもんの箸づくりを、しかも一家皆殺しとは何と殺生な、
たった一本の木ぐらいで殺してなるものか。」
と旅を止めて処刑場に急ぐのでした。」

村人3

「和尚さんには役人も頭があがらねえからな。」
その時代には、お坊さんの力も強くて、お坊さんの助言があれば刑を軽くして貰う事も出来たのです。村人たちは、我先にとお寺に行きましたが、あいにく和尚さんは、旅に出ていて留守でした。お寺の留守い番の人は

村人2

「おお、そうだ、濟運寺の和尚さんに頼んでみよう。」
「そうだそうだ。役人も和尚さんの頼みは無げには出来ねえだろう。子供らだけでも助けてもらおう。」

村人1

村人たちは口々に言つて何か良い考えがないか相談しました。



女房

その頃ころ箸職人たちは、泣く泣くしよけいじょう処刑場に向かっています。処刑場は、丘の上のさびしい場所ばしよにありました。役人たちに追おい立てられて7人は登のぼっていききました。丘にいくまでの坂道さかみちは、わずか300メートルですが、急坂きゅうざかで一人で上るのさえ容易よういではありません。箸職人の女房にようぼうは、五人の子供の手を引いたりおぶったりしながら「えんこらしよ。えんこらしよ。みんなすまないねえ。すまないねえ。」

箸職人

と涙なみだに枯かれた声を絞しぼってやっと登のぼっていききました。箸職人は、「えんこら。えんこら。何の罪もない子らは助けたかった。子供たちが不憫ふびんじゃ。」と泣きながら登のぼっていききました。

処刑場では、村人たちは、和尚さんが来るのを今か今かと待まっていました。和尚さんを待まちっていたのは、村人だけでなく役人の手下てしたも同じ思いだったのです。まだ幼わかい子供たちの首をはねるのは、掟おきてとはいえあまりにもむごいとためらっていたのです。

手下

「坊主ぼうずはいねえか。坊主はいねえか。」



和尚

和尚

と処刑場を取り囲んでいる村人たちに叫びました。

その頃和尚さんは、必死になって処刑場に向かっていました。

が、和尚さんは生まれつき片足が悪かったので、思うように歩けなかったのです。

和尚さんが、息をきらして駆けつけたのは、処刑が終わって間もなくのことでした。

「間に合わなかったか。無念じゃ。かわいそうなことをした。」

そういつて深く腰を落とし、うなだれました。そして

「せめてあの世で親子そろって暮らせるようにのう。」

と涙ながらに新しい塚をつくり、村人たちと厚くとむらってやりました。

それから程なくして、新しい塚にとりすがって泣いている娘がいました。それはただ一人、嫁にいった箸職人の娘でした。嫁にいったので娘は殺されずにすんだのでした。

この7人を葬ったのが、「七人塚」でこの塚の南側にある坂は、えんこらさと登った坂なので「えんこら坂」と名づけられたのでした。



かこ



祖母 かこ 祖母 かこ

「おばあちゃん、悲しいお話ねえ。」

「本当にねえ。おばあちゃんも昔聴いた時切なかつたよ。」

「うん。」

「かこちゃん、さあてとお箸みつけようかねえ。どっこいしよつと。」
かこちゃんは、おばあちゃんと手をつないで歩きはじめました。

そしてお父さんお母さんお兄ちゃんそれにおばあちゃんと一緒にいる自分って幸せなんだなあ、と思いました。

「お父さんとお母さんの気にいるお箸みつけようねえ。ねえおばあちゃん。」

注釈 : 吉岡のある家には今も七人の位牌が祭られていて冥福を祈ってられます。

濟運寺：臨濟宗のお寺で本尊は江戸時代の木造釈迦如来像です。

本堂は十八世紀前期、庫裏は文久三年（一八六三）の建築です。春日局の位牌と局が使ったという茶釜があり、またこのあたりに局の御殿があったといわれています。